

# 第1章

## 幼児の生活



高岡 純子 (1、3～5節)

田村 徳子 (2節)

荒牧 美佐子 (6節)



## 第1節 生活リズム

20年間で早寝早起き傾向がさらに強まっている。また、幼稚園児、保育園児ともに家を出る時刻は早まる一方であり、園児が家の外で過ごす平均時間は20年間で長くなっている。  
この節では睡眠や食事などの基本的な幼児の生活リズムをみていきたい。

### ●平日の起床時刻は早まっている

はじめに、平日の起床時刻をみてみよう(図1-1-1)。15年では、幼児の3割弱が7時より早い時間に起床している。5年前と比べると「6時半頃」以前の時間帯が増加した。20年間の変化をみてみると、「6時半頃」以前に起きている比率は、95年8.9%、00年10.6%、05年14.4%、10年21.3%、15年28.9%と増加しており、この20年間で幼児はますます早起きになっており、とくにこの10年間でその傾向が強まっていることがわかる。起床時刻を低年齢(1歳6か月~3歳11か月)・高年齢(4歳~6歳11か月)の年齢区分ごとに、就園状況別でみてみよう(表1-1-1)。低年齢では幼稚園児はごくわずかであるため、未就園児と保育園児で比較を、高年齢では未就園児はごくわずかであるため、幼稚園児と保育園児で比較を行う。低年齢では「6時半頃」以前

に起床すると回答した保育園児が42.1%、未就園児が18.6%と保育園児のほうが起床時刻が早かった。高年齢では、保育園児が43.3%に対し、幼稚園児は26.6%と保育園児のほうが早い傾向であった。

### ●20年間で早寝傾向がみられる

次に就寝時刻をみてみよう(図1-1-2)。15年では「21時頃」から「21時半頃」に就寝する幼児が約半数を占めている。21時台がピークとなる全体傾向は20年間で変わらない。比較的遅いと考えられる「22時頃」以降に寝る幼児の比率を合計してみると、95年32.1%、00年39.0%、05年28.5%、10年23.8%、15年24.0%と20年前からは8.1ポイント、10年前からは4.5ポイント減少しており、この20年間で幼児の早寝が増えてきたことがわかる。年齢区分ごとに、就園状況別で

図1-1-1 平日の起床時刻(経年比較)

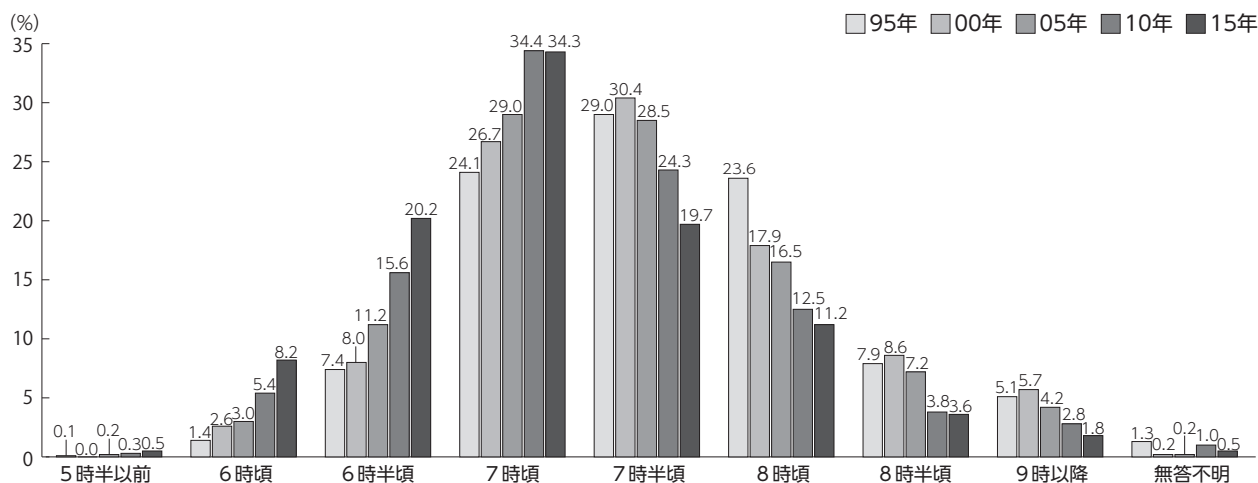


表1-1-1 平日、「6時半頃」以前に起床する割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
18.6	42.1	26.6	43.3

注1) ( )内はサンプル数。

注2) 「5時半以前+6時頃+6時半頃」の%

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。

幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

みてみると(表1-1-2)、低年齢では22時頃以降に就寝すると回答した保育園児が36.2%、未就園児が25.1%と保育園児のほうが就寝時刻が遅く、高年齢では、保育園児が40.5%に対し、幼稚園児は11.1%と保育園児のほうが遅い傾向であった。保育園児は、未就園児・幼稚園児に比べて起床時刻は早く、就寝時刻は遅い傾向

がみられた。

●食事をする時刻の傾向

朝食の時刻を20年間で比べたものが図1-1-3である。起床時間と同様に年々早くなっており、特にここ

図1-1-2 平日の就寝時刻(経年比較)

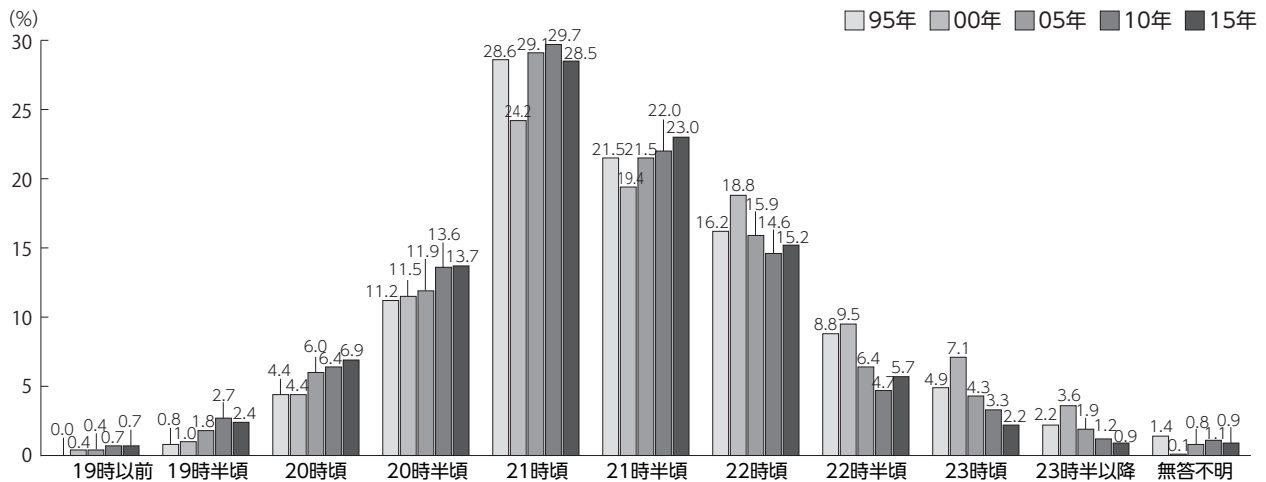


表1-1-2 平日、「22時頃」以降に就寝する割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
25.1	36.2	11.1	40.5

注1) ( )内はサンプル数。  
 注2) 「22時頃+22時半頃+23時頃+23時半以降」の%。  
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。  
 保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

図1-1-3 平日の朝食時刻(経年比較)

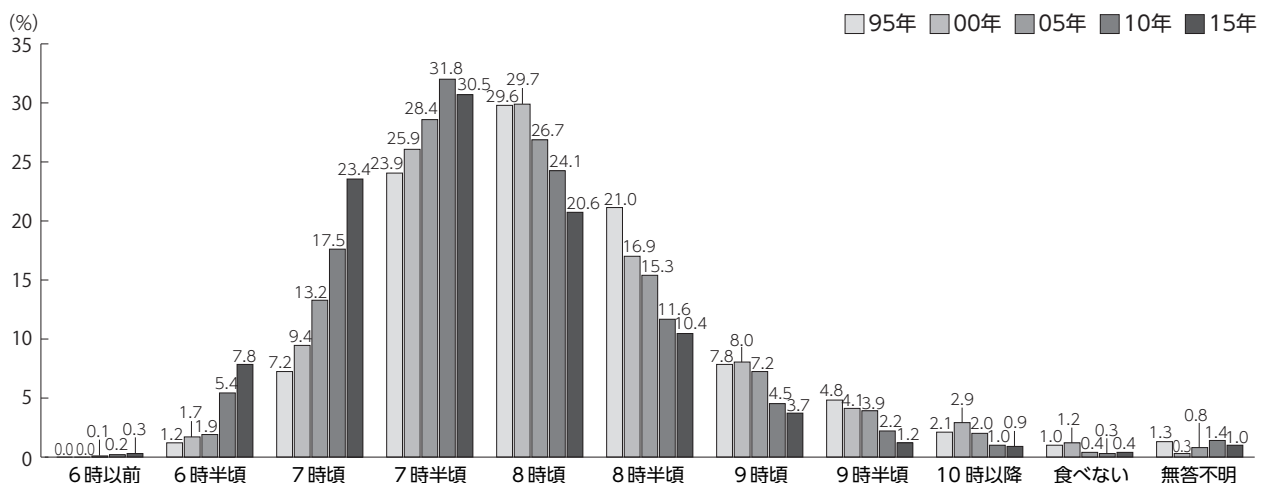


表1-1-3 平日、「7時半頃」以前に朝食をとる割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
36.1	82.6	67.8	80.1

注1) ( )内はサンプル数。  
 注2) 「6時以前+6時半頃+7時頃+7時半頃」の%。  
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。  
 保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

5年間で比べると「7時頃」で5.9ポイント増加した。「7時半頃」以前に朝食をとる比率を年齢区分別・就園状況別でみると(表1-1-3)、低年齢では保育園児が82.6%、未就園児36.1%、高年齢でも保育園児80.1%、幼稚園児67.8%が「7時半頃」以前に朝食をとることがわかった。起床時刻と同様に多くの保育園児が早い時刻に朝食をとっていることがわかる。

次に、夕食の時刻を20年間で比べたのが図1-1-4である。夕食の時刻は20年間変わらず「18時頃」から「19

時頃」に集中している。15年の調査において「19時半頃」以降に夕食をとる比率を子どもの年齢区分・就園状況別にみてみよう(表1-1-4)。低年齢では保育園児が23.6%、未就園児11.9%、高年齢では保育園児30.5%、幼稚園児9.8%が「19時半頃」以降に夕食をとると回答していた。保育園児のほうが未就園児や幼稚園児にくらべて、朝食が早く、夕食は遅い傾向にあるといえるだろう。

図1-1-4 平日の夕食時刻(経年比較)

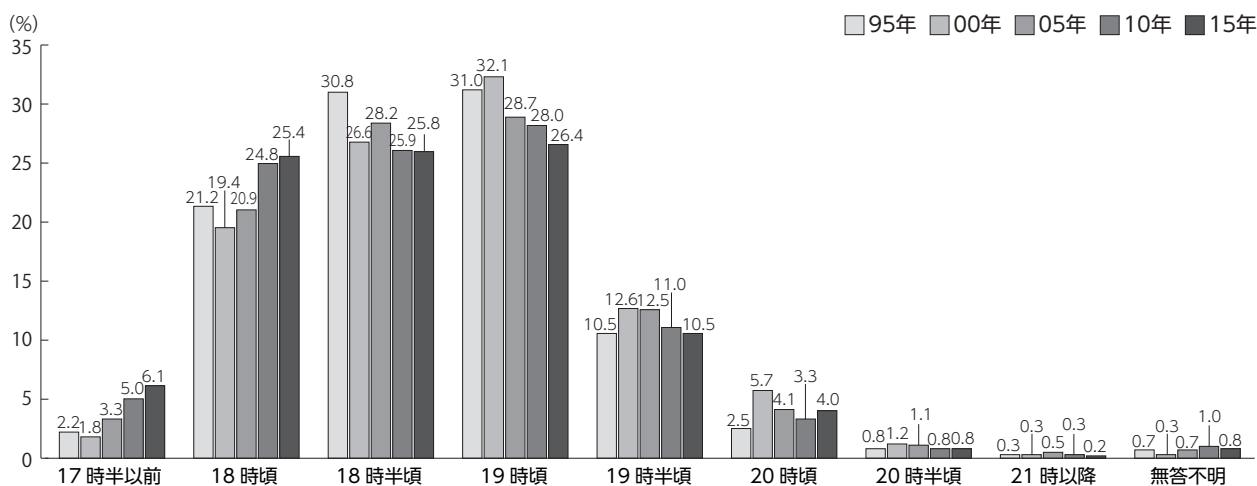


表1-1-4 平日、「19時半頃」以降に夕食をとる割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
11.9	23.6	9.8	30.5

注1) ( )内はサンプル数。

注2) 「19時半頃+20時頃+20時半頃+21時以降」の%。

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。

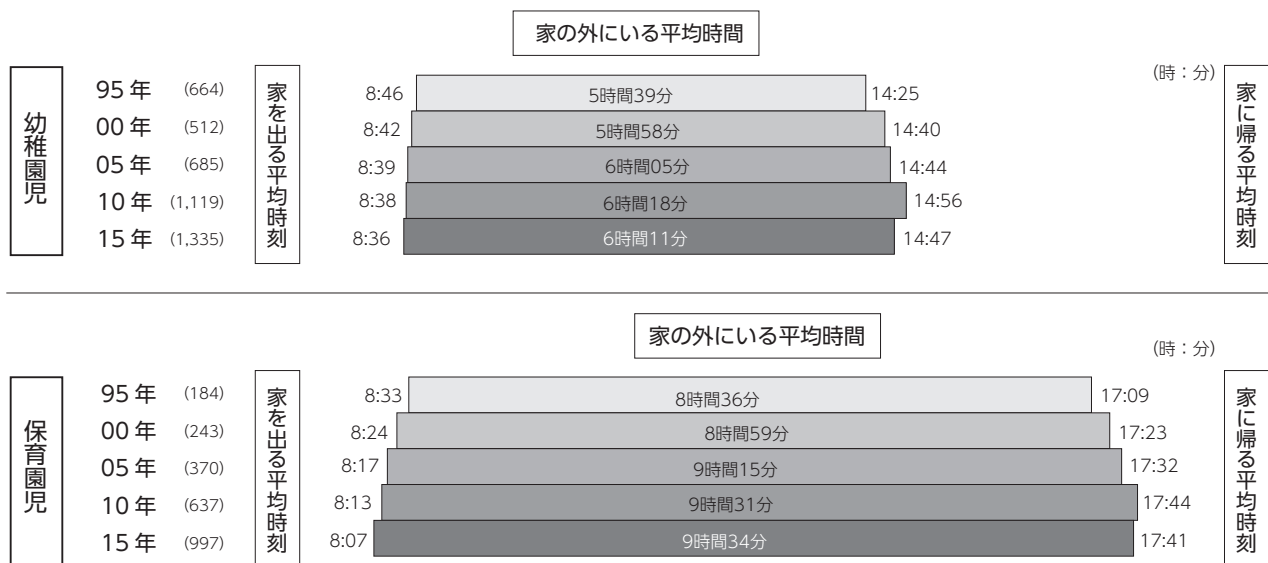
幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

●幼稚園児も保育園児も家を出る時刻が早くなっている。

家を出る平均時刻・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間を就園状況別にまとめたものが図1-1-5である。20年間で、園に向けて家を出る平均時刻は、幼稚園児では10分早くなり、保育園児では26分早くなった。また、家に帰る平均時刻は、幼稚園児では22分、保育園児では32分遅くなった。その結果、家の外にいる平均時間は、幼稚園児は32分長くなり6時間11分に、保育園児は58分長くなり、9時間34分になった。ただし、

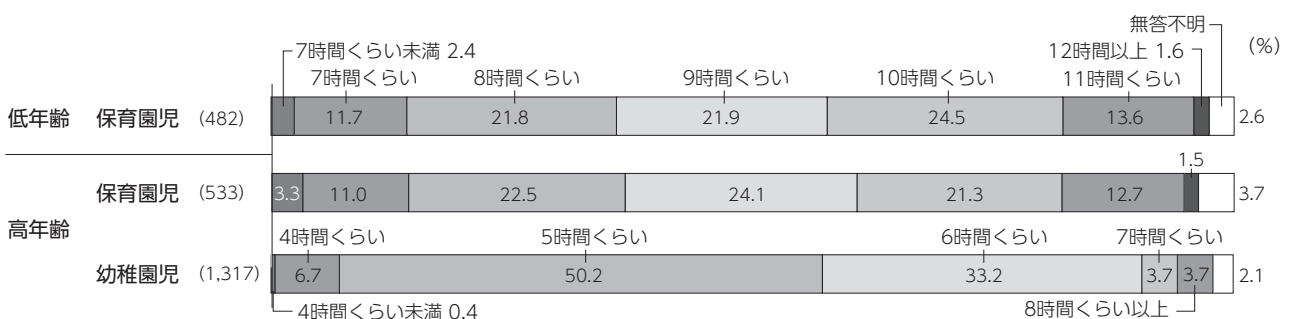
10年から15年にかけては、幼稚園児は若干短くなっている(幼稚園児7分)。20年間で家に帰る時刻が遅くなっている傾向は、就労する母親の増加を背景に、預かり保育や延長保育を実施する園が増加していることも一因だろう。また、園で過ごす平均時間を見てみると(図1-1-6)、保育園児では「8時間くらい」から「10時間くらい」が約7割を占め、幼稚園児では「5時間くらい」(50.2%)と「6時間くらい」(33.2%)で約8割を占めている。また保育園児の14~15%は11時間以上、園で過ごしているようである。

図1-1-5 家を出る・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間(就園状況別 経年比較)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。  
 注2) 家を出る時刻、家に帰る時刻のいずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。  
 注3) 95年調査は、「18時以降」を18時30分、00年調査以降は、「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。  
 注4) 家の外にいる平均時間は、家を出る平均時刻と家に帰る平均時刻から算出した。  
 注5) ( )内はサンプル数。

図1-1-6 園で過ごす平均時間(年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。  
 注2) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。  
 保育園児(低年齢)：1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 幼稚園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 注3) 保育園児について「4時間未満」から「6時間くらい」を「7時間くらい未満」に、幼稚園児について「8時間くらい」から「12時間以上」を「8時間くらい以上」としている。  
 注4) ( )内はサンプル数



## 第2節 習い事

習い事をしている比率は5年前と変わらないが、高年齢の保育園児で増加傾向だった。低年齢の未就園児では体を動かすもの、保育園児では通信教育と英会話が多い。一方、高年齢の幼稚園児でサッカーと体操の習い事が多かった。

### ● 習い事をしている比率は5年前と変わらない

1歳6か月～6歳11か月の幼児が習い事をしている比率は、00年が49.4%、05年が57.5%、10年が47.4%、15年が48.6%だった。05年から10年にかけて10.1ポイント減少し、15年はそこからほぼ横ばいだった(表1-2-1)。

次に、子どもの年齢別にみると、年齢が上がるにつれて習い事をしている比率が増加する傾向は、この20年間で変わらなかった。15年に注目すると、習い事をしている比率は3歳児で29.8%、4歳児で47.9%と18.1ポイント上昇していた。経年で比較しても、4歳児以上では05年に次ぐ高い比率で習い事をしてきた。05年は習い事を始める時期の低年齢化が指摘され、10年は全体的に習い事の減少傾向が指摘された。15年の特徴として、3歳児までの低年齢で習い事をする比率が低く、4歳児以降の高年齢で習い事をしている比率が急激に高

まる傾向がみられた。

### ● 習い事をしている比率は幼稚園児で高い。高年齢の保育園児で増加傾向

子どもの就園状況で習い事をしている比率に差はあるだろうか。表1-2-2で低年齢(1歳6か月～3歳11か月)をみてみよう。15年で未就園児が習い事をしている比率は28.0%、保育園児は18.9%と9.1ポイントの差があり、未就園児の比率がやや高かった。高年齢(4歳0か月～6歳11か月)になると、15年で幼稚園児が習い事をしている比率は73.0%、保育園児は56.7%と16.3ポイントの差がみられ、幼稚園児のほうが習い事をしている比率が高かった。

10年と15年で変化はあっただろうか。低年齢の未就園児と保育園児、高年齢での幼稚園児において比率に差はみられなかった。一方、高年齢の保育園児では10年

表1-2-1 習い事をしているか(子どもの年齢別 経年比較)

	(%)			
	00年	05年	10年	15年
全体	49.4	57.5	47.4	48.6
1歳後半児	23.3	25.1	17.1	17.0
2歳児	26.8	37.3	24.6	25.7
3歳児	42.0	50.9	37.7	29.8
4歳児	47.2	54.9	45.8	47.9
5歳児	68.6	75.1	67.6	71.4
6歳児	75.7	85.5	76.7	82.7

注1) 習い事を「している」の%。注2) 1歳後半児は、1歳6か月～1歳11か月の幼児。

表1-2-2 習い事をしているか(子どもの年齢区分別・就園状況別 経年比較)

		(%)	
		10年	15年
低年齢	未就園児	29.7	28.0
	保育園児	19.7	18.9
高年齢	幼稚園児	71.3	73.0
	保育園児	46.9	56.7

注1) 習い事を「している」の%。注2) 網掛けは、10年と15年を比べて、5ポイント以上差があるもの。

注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。

低年齢: 1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢: 4歳0か月～6歳11か月の幼児。

注4) サンプル数は以下のとおり。

低年齢: 未就園児10年869人、15年948人。保育園児10年297人、15年482人。高年齢: 幼稚園児10年1,121人、15年1,317人。保育園児10年376人、15年533人。

が46.9%、15年が56.7%と半数を超え、9.8ポイント増加した。就園状況別の特徴として、幼稚園児のほうが保育園児より習い事をする比率が高いが、この5年で高年齢での保育園児に増加傾向があるといえよう。

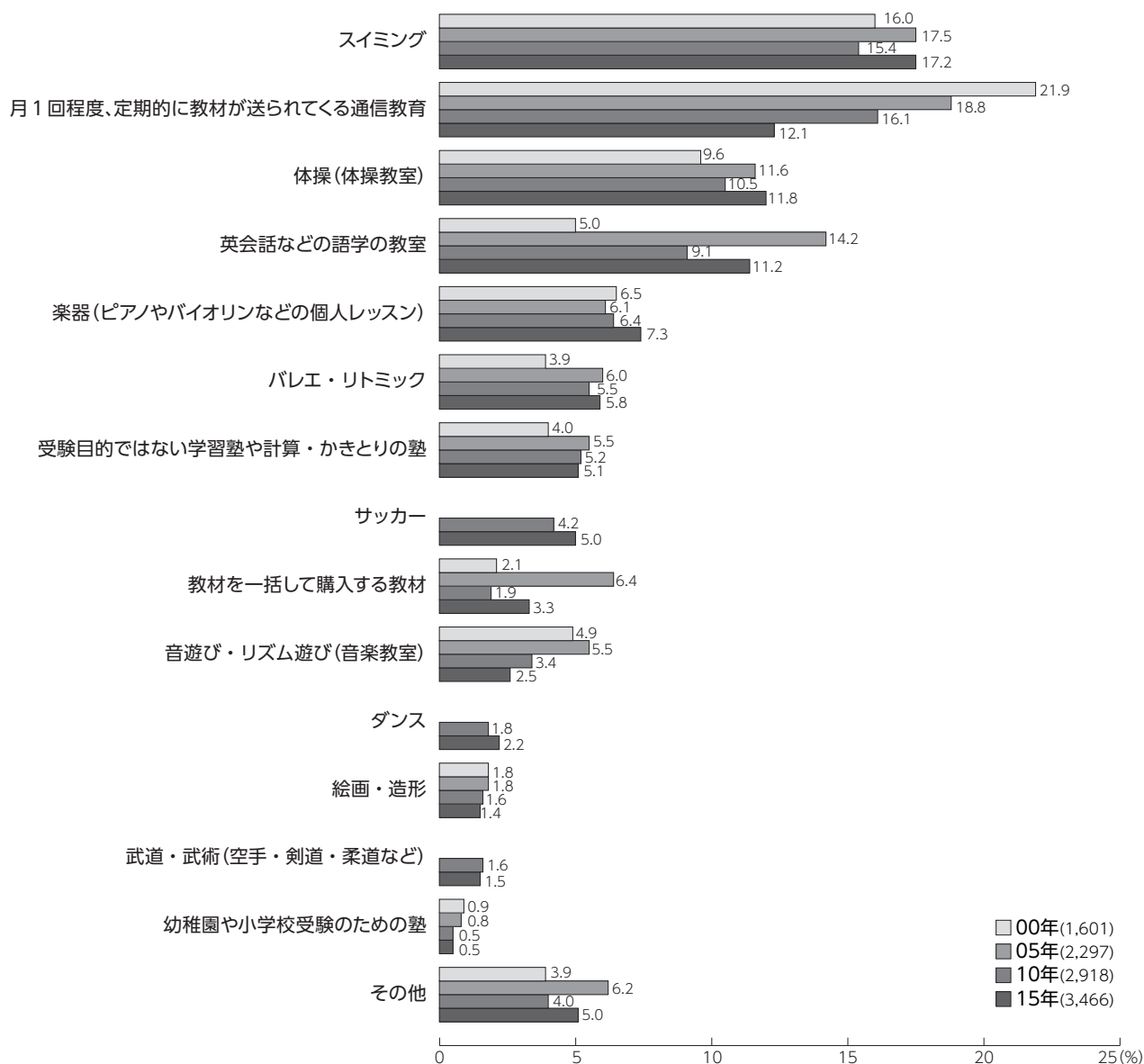
●習い事は、スイミング、通信教育、体操、英会話などの語学の教室が多い

幼児の習い事の種類には、どのような傾向があるか。

10年と15年では、幼稚園・保育園で有料で習っているものと幼稚園・保育園以外で有料で習っているものとに分けてたずねたため、少なくともどちらかで習っていると答えた比率を算出し、20年間の結果をみていきたい。

図1-2-1で15年をみると、多い順に「スイミング」17.2%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」12.1%、「体操（体操教室）」11.8%、「英会話などの語学の教室」11.2%だった。05年と10年も順位の入れ替わりはあるが、この4項目の比率が高かった。

図1-2-1 習い事の種類（経年比較）



注1) 複数回答。  
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた全員の回答を母数としている。  
 注3) 10年調査以降は、「幼稚園・保育園で有料で習っているもの（保育時間中に習っているものは除く）」と「幼稚園・保育園以外で習っているもの」に分けて、習い事の種類をたずねた。そのため、ここでは少なくともどちらか一方で、習っていると回答した比率を示した。なお、00年調査、05年調査は、どこで習っているかを分けてたずねていない。  
 注4) 10年調査で名称を変更した項目、および10年調査以降の項目。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」に変更、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操（体操教室）」、「絵画の教室」→「絵画・造形」、「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び（音楽教室）」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」「リトミック」（集計は経年比較するために合算）。「サッカー」「ダンス」「武道・武術（空手・剣道・柔道など）」は10年調査以降の項目。  
 注5) ( )内はサンプル数。

●低年齢の未就園児では体を動かすもの、  
保育園児では通信教育と英会話が多い

15年を子どもの就園状況別にみた。表1-2-3をみると、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）の場合、未就園児では体を動かすもの（「バレエ・リトミック」、「スイミング」、「体操」）と「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学の教室」の比率が高かった。保育園児では「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学の教室」の比率が高く、次いでスポーツ系の習い事をしていった。高年齢（4歳0か月～6歳11か月）の場合、幼稚園児、保育園児ともに「スイミング」の比率がもっとも高かった。次いで、幼稚園児では「体操」、「英会話などの語学

の教室」、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「楽器」の順に並んだ。一方、保育園児では低年齢の場合と同様に「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学教室」が高い比率で続き、「楽器」、「体操」の順に並んだ。

低年齢について、未就園児では体を動かすもの、保育園児では通信教育や英会話教室を習い事を選ぶ傾向があるようだ。高年齢になると幼稚園児で習い事をする比率が増加し、スイミングや体操といった体を動かすものに加えて、英会話や通信教育、楽器も習っていた。保育園児でも幼稚園児ほどではないが習い事をする比率が増え、低年齢で選ばれていた通信教育や英会話教室に加えて、スイミングや楽器も習っていた。

表1-2-3 習い事をしているか（子どもの年齢区分別・就園状況別 15年）

(%)

未就園児 (948)			保育園児 (482)		
低年齢	1. バレエ・リトミック	8.6	低年齢	1. 通信教育	6.7
	2. 通信教育	7.5		2. 英会話	4.5
	3. スイミング	6.3		3. スイミング	4.0
	4. 体操	5.0		4. バレエ・リトミック	2.5
	5. 英会話	4.2		4. 一括購入する教材	2.5
	習い事をしていない	70.1		習い事をしていない	79.4
幼稚園児 (1,317)			保育園児 (533)		
高年齢	1. スイミング	29.3	高年齢	1. スイミング	22.2
	2. 体操	23.2		2. 通信教育	14.1
	3. 英会話	18.7		3. 英会話	12.5
	4. 通信教育	16.6		4. 楽器	10.8
	5. 楽器	13.8		5. 体操	8.1
	習い事をしていない	26.6		習い事をしていない	43.1

注1) 複数回答。

注2) 「その他」を含む16項目の中から上位5項目を掲載。

注3) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた全員の回答を母数としている。

注4) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。

低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。

注5) ( ) 内はサンプル数。



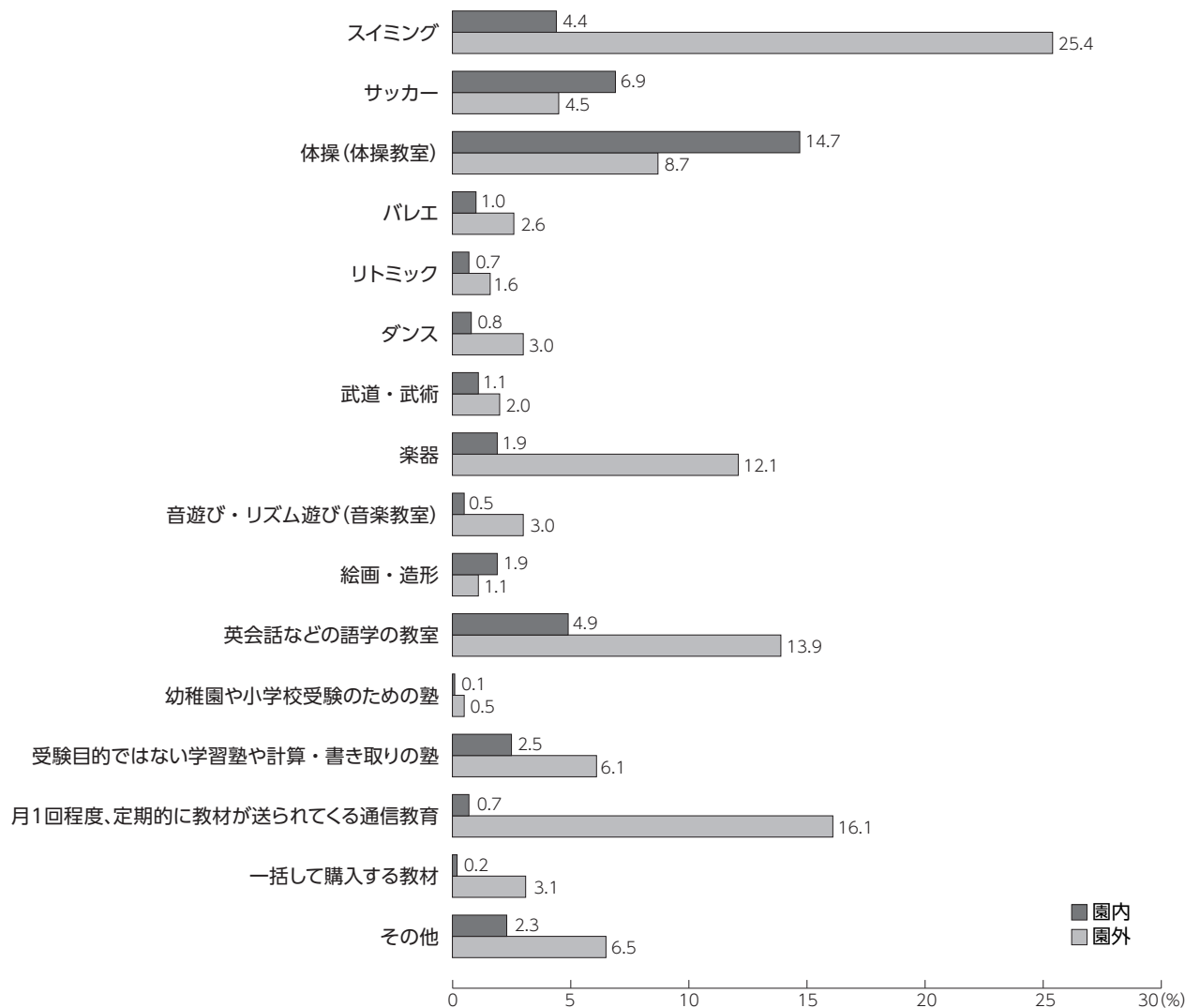
●幼稚園児で、園内の習い事として体操とサッカーが多い。園外では、スイミング、通信教材、英会話などの語学の習い事、楽器が多い。

高年齢の幼稚園児と保育園児の習い事について分析した。図1-2-2は、幼稚園児の園内と園外の有料の習い事についての結果である。

園内で習っている比率が高かったのは、「体操」

14.7%、「サッカー」6.9%だった。これは園外で習うよりも高い比率であり、保育園児と比べても高い比率だった。幼稚園内で体操とサッカーの習い事が多い様子がうかがえる。園外で習っている比率が高かったのは、「スイミング」25.4%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」16.1%、「英会話などの語学の教室」13.9%、「楽器」12.1%だった。

図1-2-2 習い事の種類 (幼稚園児・園内外別 高年齢 15年)



注1) 複数回答。  
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた幼稚園に通う人全員の回答を母数としている。  
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。  
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。  
 注4) サンプル数は、1,317人。

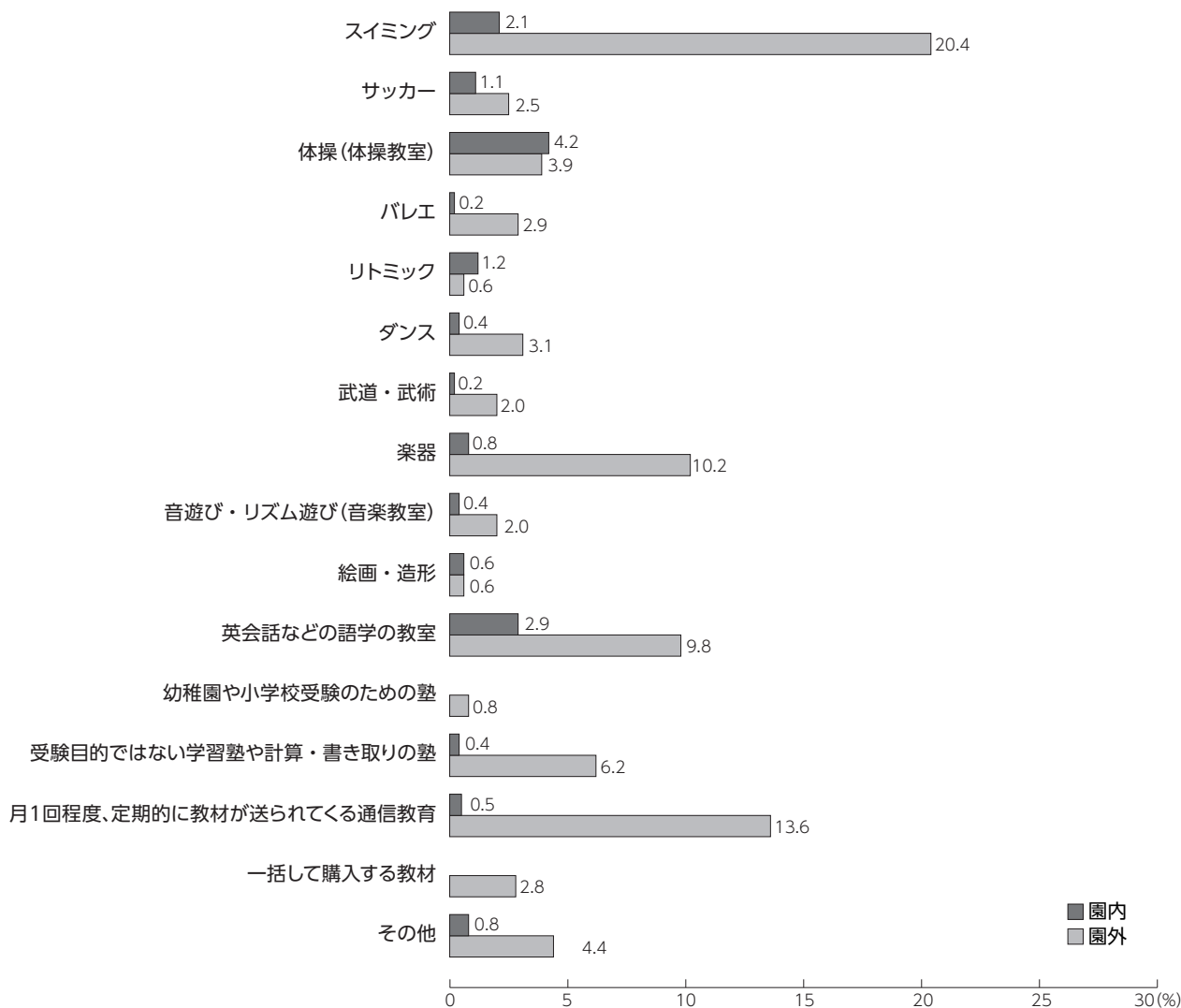
●保育園児で、園内の習い事はいずれも5%以下と少ない。園外では、スイミング、通信教材、英会話などの語学の習い事、楽器が多い。

図1-2-3は、保育園児（高学年）の園内と園外の有料の習い事についての結果である。

園内で習っている比率は、いずれの項目も5%以下であり、保育園児の場合、園内で有料の習い事をあまりしていない様子が見える。一方、園外で習っている比率が

高かったのは、「スイミング」20.4%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」13.6%、「英会話などの語学の教室」9.8%、「楽器」10.2%だった。幼稚園児と保育園児で習う比率の差が5ポイント以上だったのは「スイミング」（幼稚園児25.4%、保育園児20.4%）のみであり、それ以外の項目で差はみられなかった。保育園児の場合、在園時間が長い傾向であることから、園外の習い事を行っている比率が低いと思われたが、幼稚園児とあまり差がみられなかった。

図1-2-3 習い事の種類（保育園児・園内外別 高年齢 15年）



注1) 複数回答。  
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた保育園に通う人全員の回答を母数としている。  
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。  
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。  
 注4) サンプル数は、533人。



### 第3節 家にあるもの

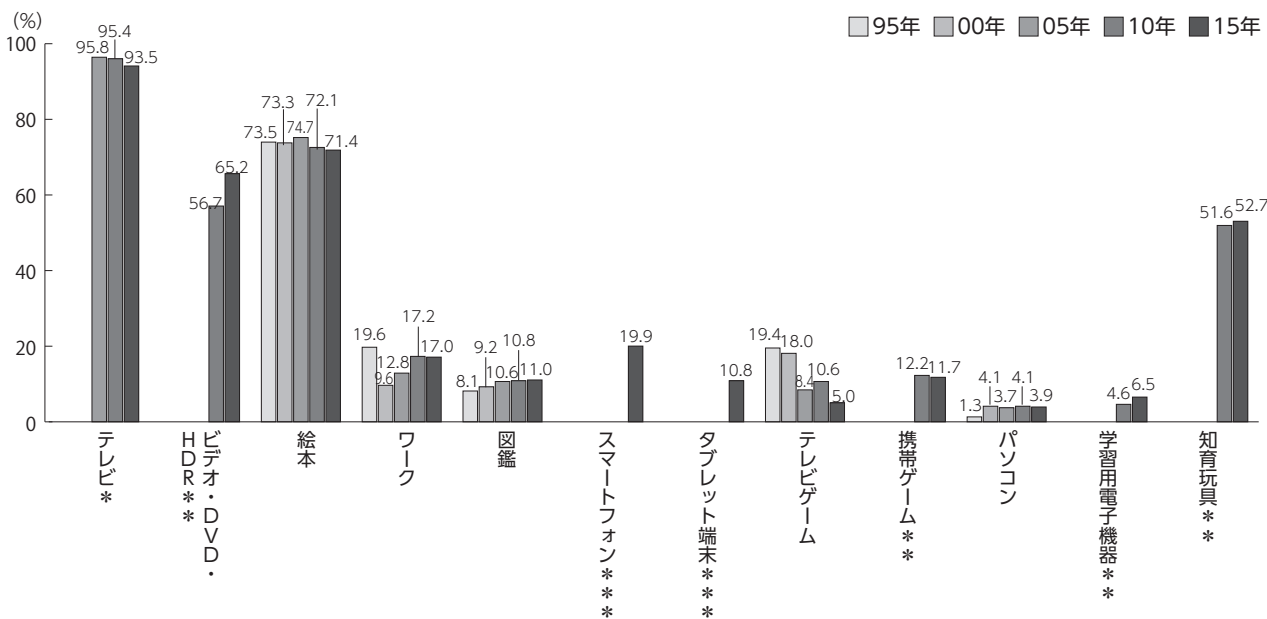
家にあるものをみると、「絵本」「テレビ」などの古くからあるものがよく使われ続けている。「ワーク」を使う頻度が15年間でやや増えた一方で、「テレビゲーム」は20年間で減少している。母親と使う頻度では「ワーク」「図鑑」が増加している。新しいメディアである「スマートフォン」は15年調査において母親と一緒に使う比率が約3割に達していた。

#### ●家にあるものを使う頻度

この節では、幼児の家にあるものと、それを使う頻度、一緒に使う人についての変化をみてみたい。経年での使用頻度の変化を見ると(図1-3-1)、もっとも頻度が高いものはテレビ、次いで絵本であるが、どちらも過去と比較して使用頻度に大きな変化はみられない。一方、

使用頻度が減少しているのはテレビゲームである。95年に19.4%であったが15年に5.0%となり20年間で14.4ポイント減少した。微増したのはワークである。95年から00年にかけては低下したが、それ以降増加傾向となり、00年9.6%、15年17.0%で7.4ポイント増加した。スマートフォンは15年のみの数値であるが19.9%であった。

図1-3-1 家にあるものを使う頻度(経年比較)



注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

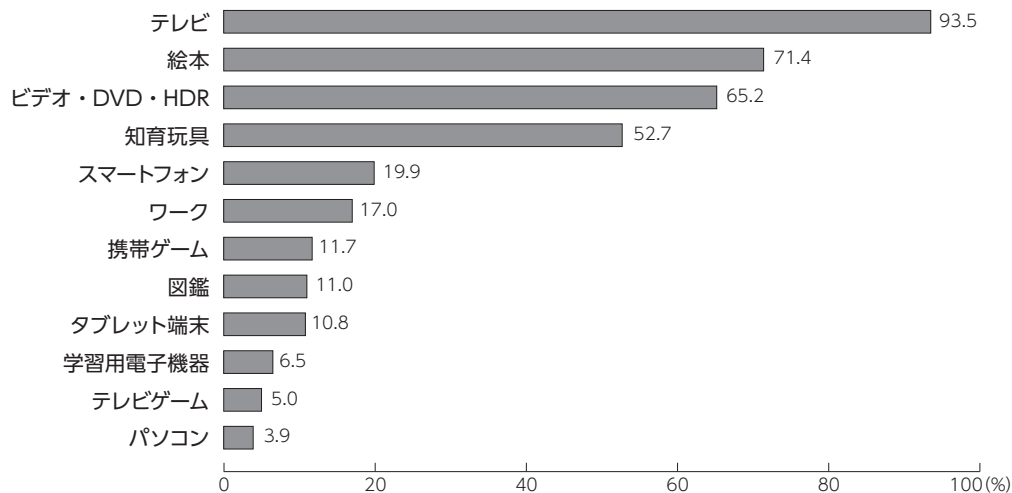
注2) 「\*」は05年、10年、15年のみの項目、「\*\*」は10年、15年のみの項目、「\*\*\*」は15年のみの項目。

注3) HDR: ハードディスクレコーダーの略。

15年のみの使用頻度をみたまものが図1-3-2である。頻度の高い順に、テレビ93.5%、絵本71.4%、ビデオ・DVD・HDR65.2%、知育玩具52.7%である。その他のものはいずれも高頻度で使用する家庭が2割以下であるが、スマートフォンが19.9%と携帯ゲーム11.7%よりも高くなっている。

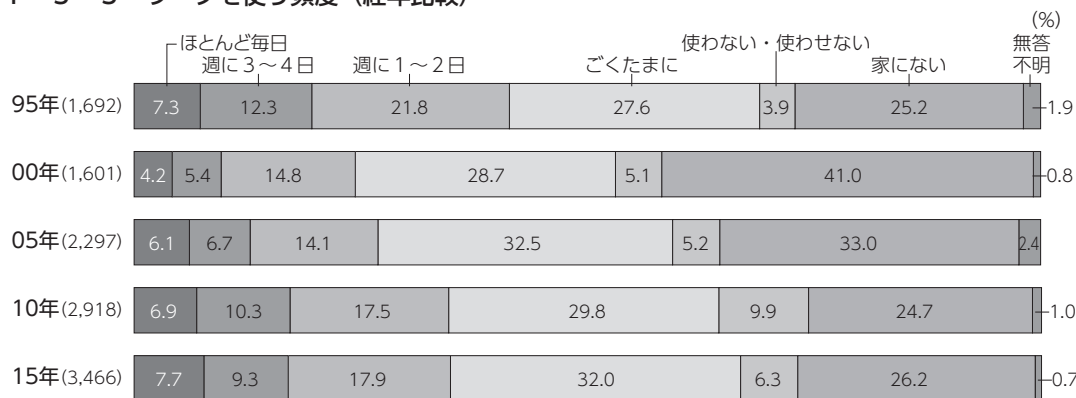
この20年間で変化があった「ワーク」「テレビゲーム」の使用頻度をみたまものが図1-3-3,4である。「ワーク」の使用頻度は、00年調査から徐々に増加している。「家がない」比率が00年から15年にかけて14.8ポイント減少した。また「テレビゲーム」は、「使わない、使わせない」「家がない」比率が増加し15年調査では合わせ

図1-3-2 家にあるものを使う頻度 (15年)



注) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

図1-3-3 ワークを使う頻度 (経年比較)

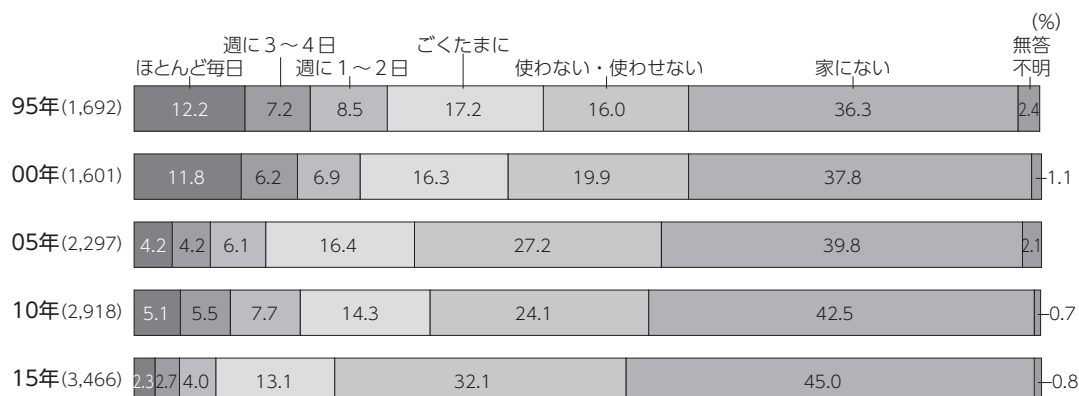


注1) 「使わない・使わせない」は、95年、00年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない」を、05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。

注2) 10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

注3) ( )内はサンプル数。

図1-3-4 テレビゲームを使う頻度 (経年比較)



注1) 「使わない・使わせない」は、95年、00年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない」を、05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。

注2) 10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

注3) ( )内はサンプル数。

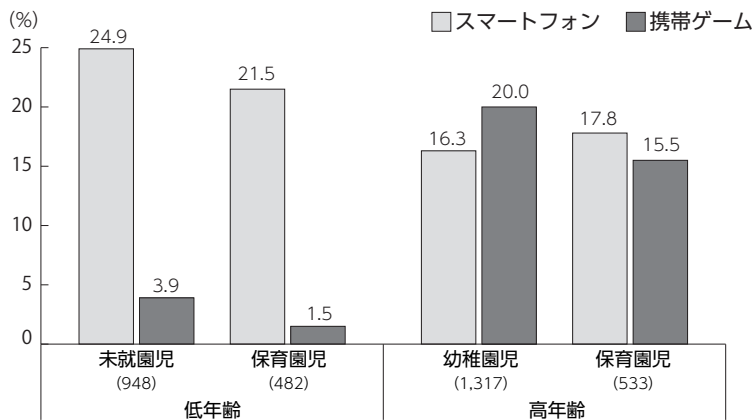
て77.1%となっている。「ほとんど毎日」「週に3~4日」「週に1~2日」を合わせると、95年は27.9%、15年は9.0%と18.9ポイント減少している。

図1-3-5は、15年の調査で子どもの年齢区分別・就園状況別にスマートフォンと携帯ゲームの使用頻度をみたものである。スマートフォンの使用頻度は低年齢児が高く、携帯ゲームは逆に高年齢児が高くなっている。とくに低年齢の未就園児では、約4人に1人が週に3~4日以上の頻度でスマートフォンを使っている。

●母親と一緒に使う頻度が高いのは「絵本」

一緒に使う人でもっとも多い母親の比率をみたものが図1-3-6である。「絵本」は20年間で一貫してもっとも高く、7割程度である。母親と一緒に使う比率が20年間で増加したものが「ワーク」と「図鑑」である。「ワーク」は、95年34.6%、00年36.6%、05年43.3%、10年45.9%、15年49.7%で、20年間で15.1ポイント増加した。「図鑑」も同様に増加の傾向で、20年間で17.8ポイント増加している。テレビやビデオ・DVD・HDRは4割~5割程度、スマートフォンは28.1%であった。

図1-3-5 スマートフォンと携帯ゲームの使用頻度 (年齢区分別・就園状況別 15年)



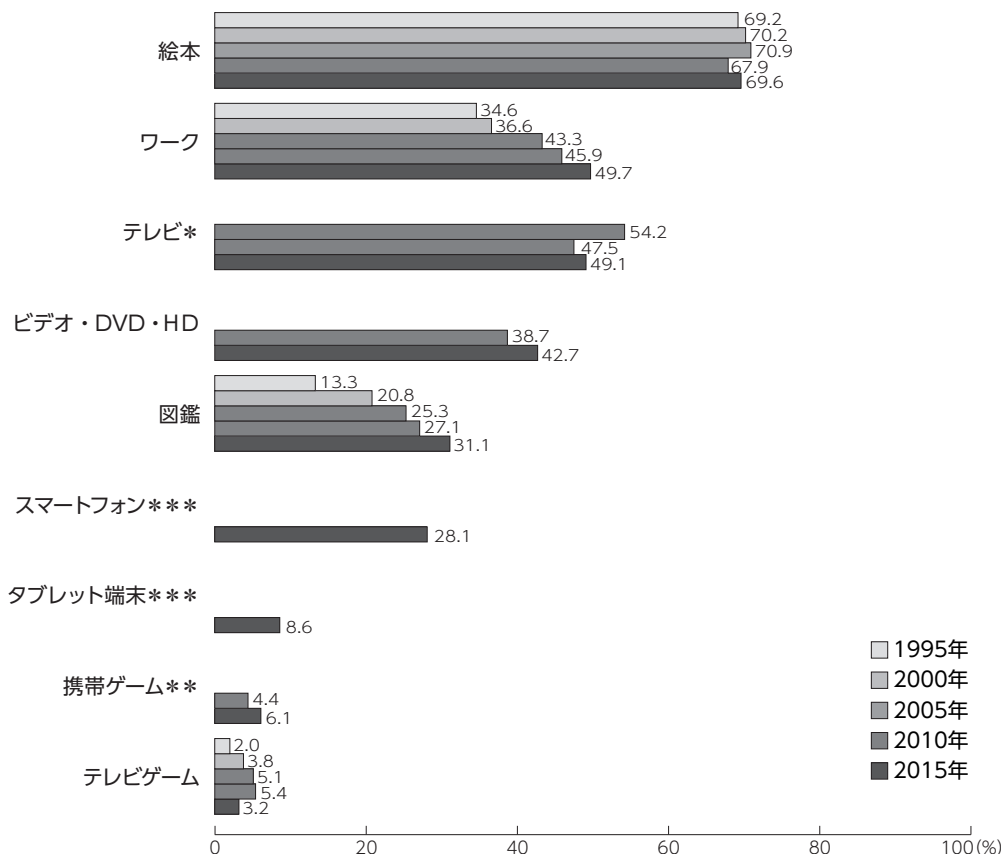
注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

注2) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児 (低年齢) : 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。幼稚園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

注3) ( ) 内はサンプル数。

図1-3-6 母親と一緒に使う頻度 (経年比較)



注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

注2) [\*] は05年、10年、15年のみの項目、[\*\*] は10年、15年のみの項目、[\*\*\*] は15年のみの項目。



## 第4節 メディアとのかかわり

テレビを1日2時間以上みている乳幼児は約5割、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーは約2割である。メディアを一人で操作できる比率では、3歳児ではスマートフォンが約4割、ビデオ・DVD・HDRが約3割であり、6歳児ではスマートフォンが約5割、ビデオ・DVD・HDRが約7割である。

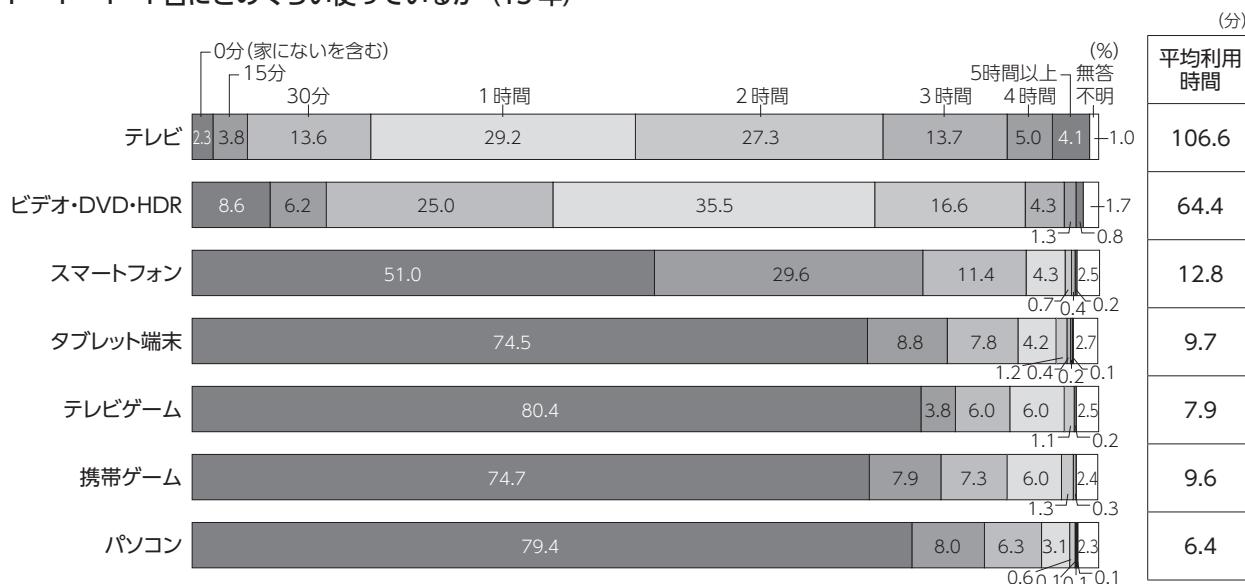
### ●家にあるものを使う頻度

この節では、テレビ、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー（以下、ビデオ・DVD・HDRと表示）などの電子メディアの使用についてみてみたい。メディアの1日あたりの視聴時間についてみたものが図1-4-1である。テレビの1日の視聴時間は、「1時間」がもっとも多く約3割である。ビデオ・DVD・HDRでは、「1時間」がもっとも多く、35.5%である。スマートフォン、タブレット端末、テレビゲーム、携帯ゲーム、パソコンでは「0分（家がないを含む）」がもっとも多く、スマー

トフォンでは約5割、他では7~8割を占めている。1日あたりの15年の平均時間をみると、テレビが106.6分、ビデオ・DVD・HDRが64.4分となっている。10年の視聴平均時間（テレビ127.0分、ビデオ・DVD・HDR65.9分）よりもやや減少傾向にあった。

視聴時間は、幼児の年齢や生活スタイルに大きな影響を受けると考えられるため、子どもの年齢区別・就園状況別にみてみよう。ビデオ・DVD・HDRでは（図1-4-2）、1日3時間以上の視聴はどのグループでも1割以下であるが、2時間以上の視聴では、低年齢未就園児31.7%、低年齢保育園児16.4%、高年齢幼稚園児

図1-4-1 1日にどのくらい使っているか（15年）



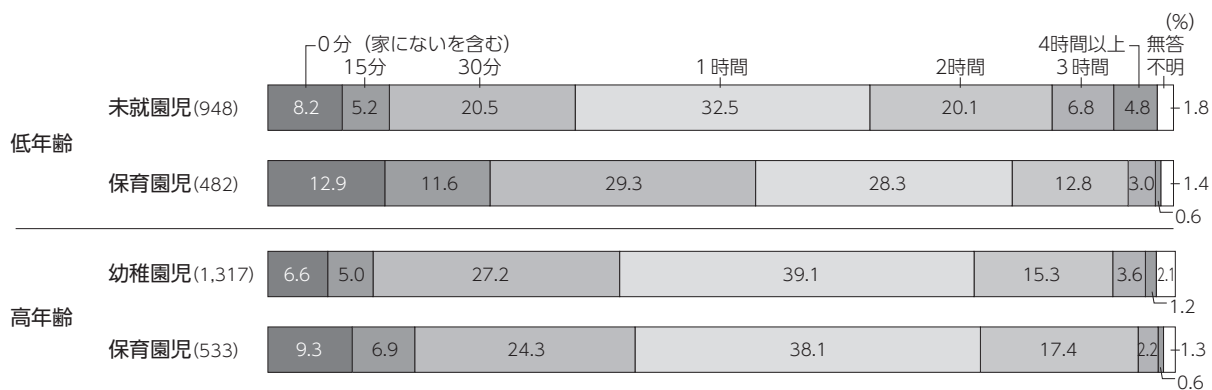
注1) 「5時間以上」は「5時間+5時間より多い」の%。

注2) 平均利用時間は「0分（家がないを含む）」を0分、「5時間」を300分、「5時間より多い」を360分のように置き換えて算出した。

20.1%、高年齢保育園児20.2%であり、低年齢未就園児がもっとも長い。保育園児や幼稚園児は、園にいる時間帯以外の朝と降園後に視聴が限られるが、未就園児にはそのような制約がなく視聴時間帯が自由なため長くなっていると考えられる。図1-4-3は、スマートフォ

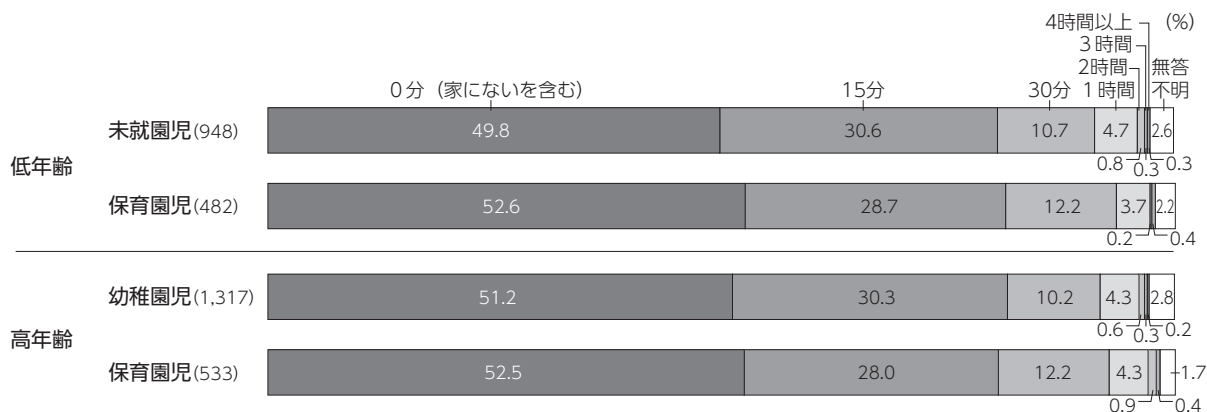
ンを年齢区分別・就園状況別にみたものである。いずれも0分が約半数を占めている。年齢や就園状況にかかわらず、1日15分の使用が約3割、30分の使用が約1割である。1日1時間の使用も5%弱となっている。

図1-4-2 ビデオ・DVD・HDRを1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) [4時間以上]は[4時間+5時間+5時間より多い]の%。  
 注2) ( )内はサンプル数。  
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。  
 保育園児(低年齢)：1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 幼稚園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。

図1-4-3 スマートフォンを1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) [4時間以上]は[4時間+5時間+5時間より多い]の%。  
 注2) ( )内はサンプル数。  
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。  
 保育園児(低年齢)：1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。  
 幼稚園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。

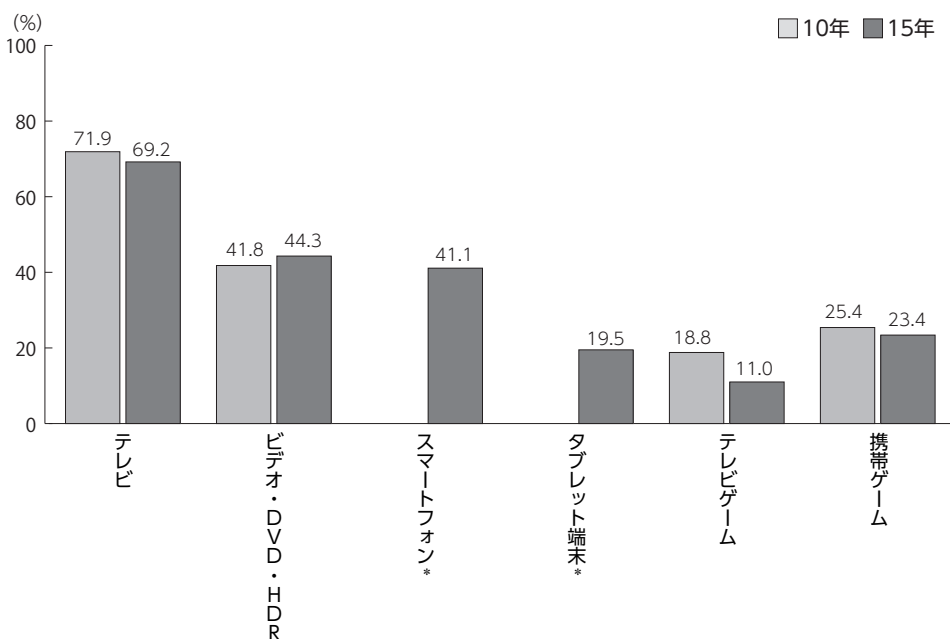
●メディアを一人で操作できる比率

次に、メディアを一人で操作できる比率について10年と15年の比較をみてみよう(図1-4-4)。子どもが一人で操作できる比率は、テレビ約7割、ビデオ・DVD・HDR約4割、携帯ゲーム約2.5割で、5年間の変化はほとんどみられない。テレビゲームは減少傾向で10年18.8%、15年11.0%と7.8ポイント減少している。スマートフォンは、41.1%(15年のみ)でビデオ・DVD・HDRとほぼ同率である。タブレット端末は約2割となっている。

メディアを一人で操作できる比率を年齢別にみたもの

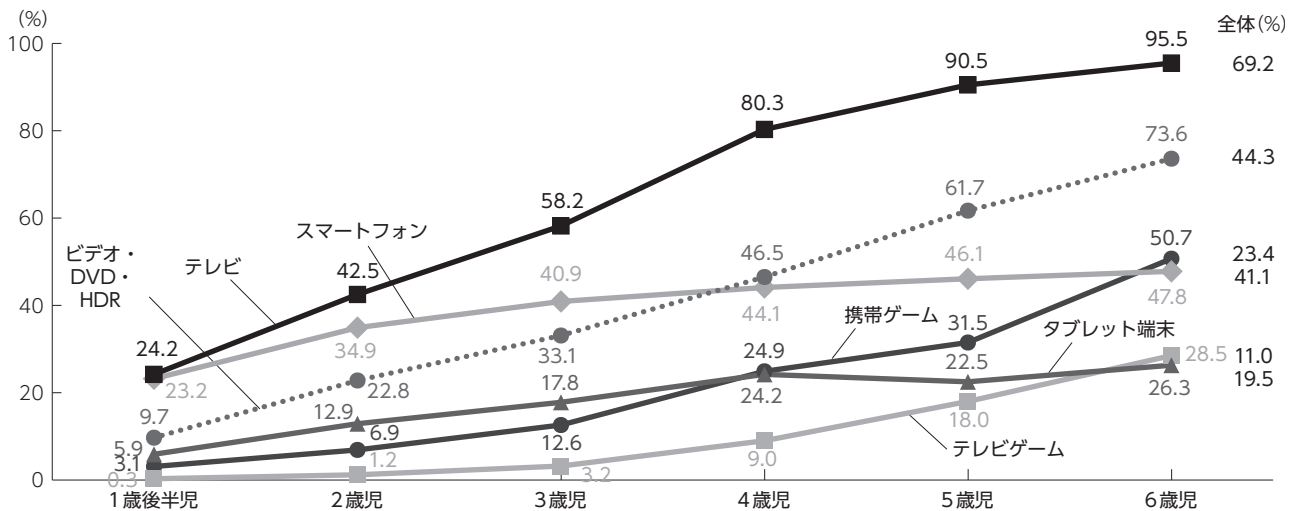
が図1-4-5である。すべての年齢で比率が高いのはテレビであり、1歳後半児で24.2%が一人で操作ができる。6歳児では95.5%となる。スマートフォンは、低年齢ではテレビに次いで一人で操作ができる比率が高い。1歳後半児で23.2%、2歳児34.9%、3歳児で40.9%と増加し、4歳児以降は4割台にとどまる。ビデオ・DVD・HDRは、1歳後半児は9.7%であるが年齢とともに増加し、3歳児で33.1%、6歳児では73.6%になる。携帯ゲームは4歳児以降で比率が高くなり、6歳児で半数を超える(4歳児24.9%、5歳児31.5%、6歳児50.7%)。

図1-4-4 メディアを自分一人で操作できる比率(10年、15年比較)



注1) 複数回答。  
注2) 「\*」は15年調査のみの項目。

図1-4-5 自分一人で操作できる割合(年齢別 15年)



注1) 複数回答。  
注2) 1歳後半児は1歳6か月～1歳11か月の幼児。





## 第5節 幼児の遊び

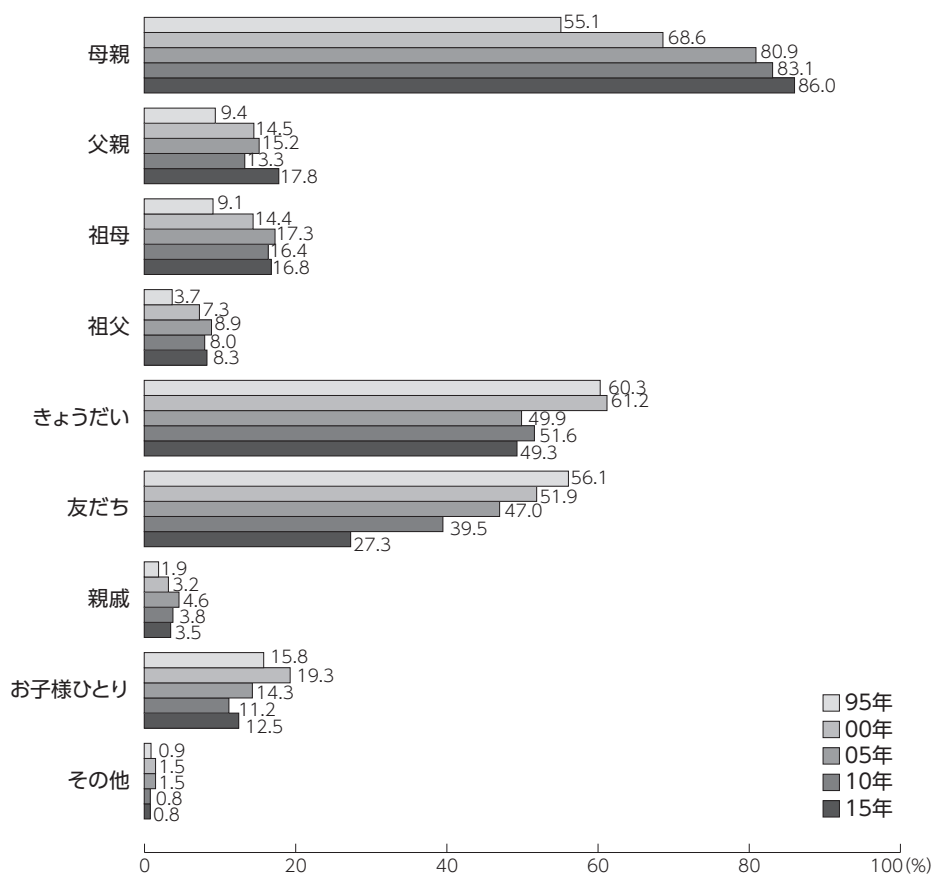
20年間を通して平日、幼稚園・保育園以外で「母親」と一緒に遊ぶ比率が増え、友だち、きょうだいと一緒に遊ぶ比率が減少している。また、幼児のよくする遊びでは、「公園の遊具(すべりだい、ブランコなど)を使った遊び」、「つみ木、ブロック」「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」であり、20年間で大きな変化はみられない。

### ●平日「母親」と一緒に遊ぶ比率が増加

平日、幼稚園・保育園以外で遊ぶときにだれと一緒にいる場合が多かたずねたところ15年でもっとも比率が高いのは「母親」86.0%であり、次いで「きょうだい」49.3%、「友だち」27.3%であった(図1-5-1)。20年間の変化をみると、「母親」が増加しており、95年55.1%、00年68.6%、05年80.9%、10年83.1%、15年86.0%と20年間で30.9ポイント増加している。一方、「友だち」と回答した比率は減少し続けており(95年

56.1%、00年51.9%、05年47.0%、10年39.5%、15年27.3%)、20年間で28.8ポイント減少した。この背景として、共働きの増加により保育園児が増えていることや幼稚園児、保育園児ともに登園のために家の外にいる時間が年々長くなっており、園以外の場所で友だちと遊ぶ時間が減っていることが考えられる。また「きょうだい」と回答した比率をみると、20年間で11.0ポイント減少している。これはこの調査の中で、1人っ子の比率が20年間で15.2ポイント増加したことが影響していると考えられる(10ページの子どもの属性を参照)。

図1-5-1 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手(経年比較)



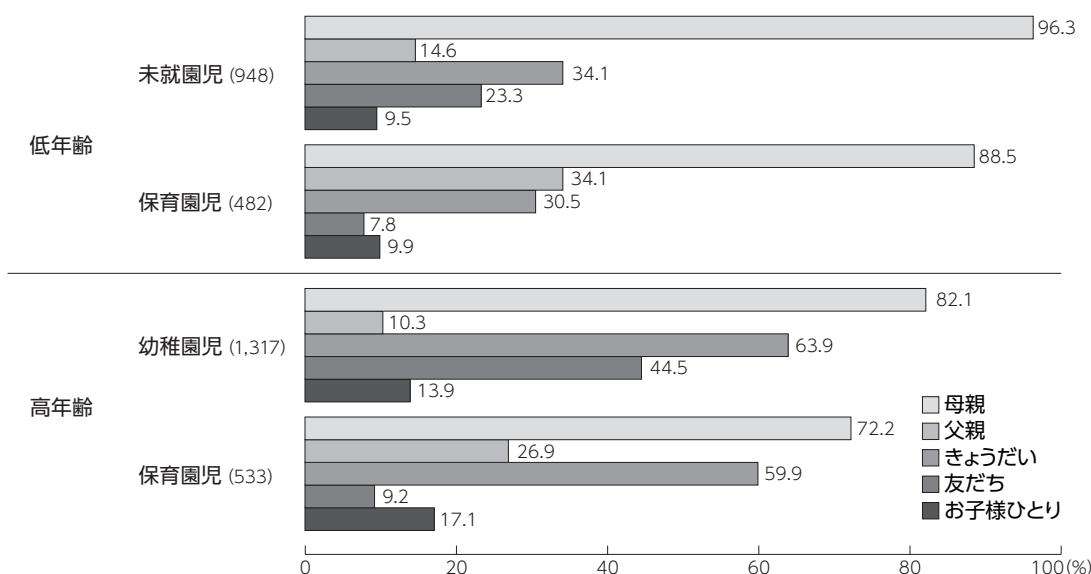
注) 複数回答。

●平日、一緒に遊ぶ相手で就園状況により差があるのは、「きょうだい」と「父親」

15年の調査結果で、平日、園以外で一緒に遊ぶ相手について、年齢区分別、就園状況別にみたものが図1-5-2である。いずれの年齢区分、就園状況においても、「母親」と回答した比率がもっとも高く、母子の密着度の高さは幼児全体の傾向であることがうかがえる。次に注目したいのは「父親」である。「父親」と答えた比率

では、低年齢、高年齢いずれも保育園児のほうが未就園児や幼稚園児よりも高い（低年齢保育園児34.1%、高年齢保育園児26.9%）。図には示していないが、父親の帰宅時間を子どもの就園状況別にみると、低年齢、高年齢ともに保育園児のほうが未就園児、幼稚園児よりも帰宅時間が早かった。保育園児の父親のほうが、家庭で子どもに接する時間が多いと考えられる。また「第3回乳幼児の父親についての調査」（ベネッセ教育総合研究所2014年）では、父親の帰宅時間を聞いているが本調査

図1-5-2 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手（年齢区分別・就園状況別 15年）



注1) 複数回答。  
注2) ( )内はサンプル数。

表1-5-1 よくする遊び（経年比較）

	95年	00年	05年	10年	15年 (%)
公園の遊具（すべりだい、ブランコなど）を使った遊び	66.0	68.4	76.1	78.1	80.0
積み木、ブロック	55.0	55.5	63.1	68.0	68.4
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2	53.5	56.9	56.6	60.5
絵やマンガを描く	45.0	43.6	57.5	53.5	50.4
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	43.8	45.5	46.1	49.8
砂場などでのどろんこ遊び	49.5	52.0	57.6	53.6	47.7
ボールを使った遊び（サッカーや野球など）	35.0	33.2	46.8	46.9	46.2
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.3	51.5	53.9	49.5	45.7
マンガや本（絵本）を読む	30.4	28.1	44.9	44.5	43.8
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	33.8	37.6	40.2	40.3
ジグソーパズル	21.9	17.9	28.8	32.9	33.0
おにごっこ、缶けりなどの遊び	13.9	13.6	20.9	23.0	27.7
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.4	17.8	26.2	25.6	27.7
なわとび、ゴムとび	14.1	12.6	19.3	21.1	20.5
*携帯ゲーム				17.8	18.1
テレビゲーム	24.2	20.2	15.1	17.0	10.5
その他	7.2	9.2	13.2	10.1	9.6

注1) 複数回答。  
注2) [\*]は10年調査、15年調査のみの項目。  
注3) 項目は15年調査結果の降順に図示。

と同様に保育園児の父親のほうが未就園児、幼稚園児の父親よりも帰宅時間が早く、子育てにかかわる比率も高い傾向にある。

一方、「きょうだい」と答えた比率をみると、低年齢では未就園児で34.1%、保育園児30.5%であるのに対し、高年齢では幼稚園児63.9%、保育園児59.9%と約6割を占め、低年齢児よりも高い。第2子と遊ぶ比率が増加するためと考えられる。

●代表的な遊びは 20 年間で変わっていない

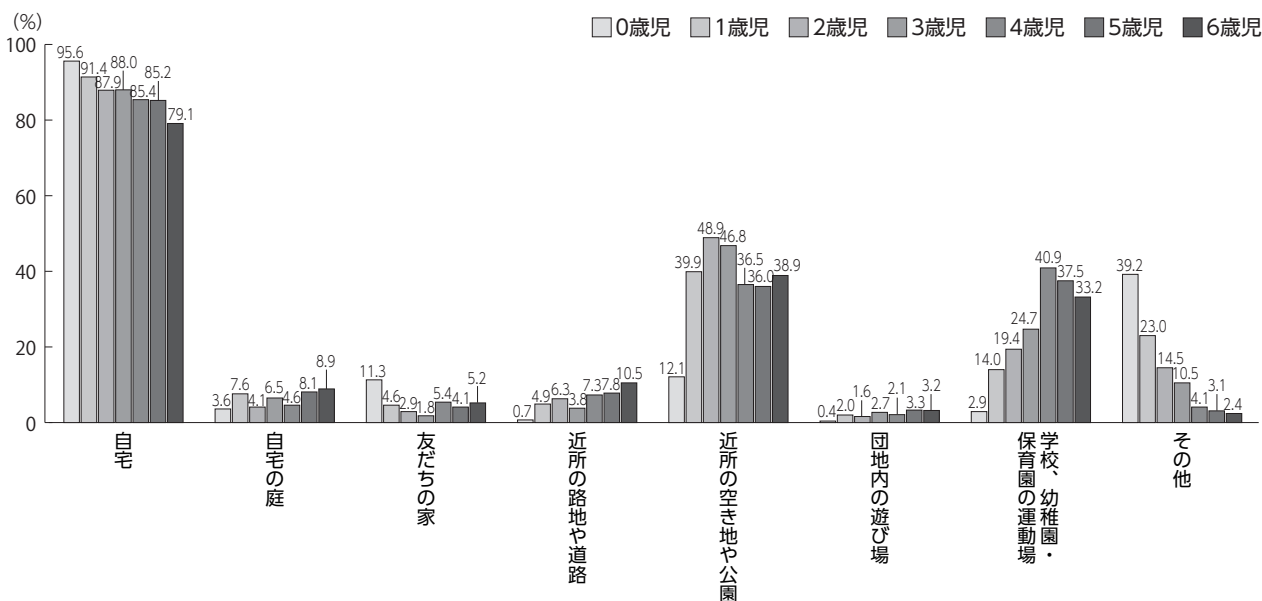
幼児がよくする遊びについて、20年間の変化をみてみよう (表1-5-1)。幼児の全体をみると、5割を超えるものは、「公園の遊具 (すべりだい、ブランコなど) を使った遊び」がもっとも多く、「つみ木、ブロック」、「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」、「絵やマンガを描く」が続き、20年間を通して順位に大きな変化はみられない。表に示していないが、年齢別でみると、低年齢

のほうが多い遊びは「つみ木、ブロック」「ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び」「砂場などでのどろんこ遊び」であり、高年齢では「自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び」や集団での遊び(「おにごっこ、缶けりなどの遊び」「なわとび、ゴムとび)、ゲームやカード(「携帯ゲーム」「テレビゲーム」「カードゲームやトランプなどを使った遊び)」があげられる。

●遊ぶ場所でもっとも多いのは「自宅」

平日、園以外で遊ぶ場所について聞いたものが図1-5-3である (2つ選択)。もっとも多いのは「自宅」、次いで「近所の空き地や公園」、「学校、幼稚園・保育園の運動場」と続く。年齢別にみると、年齢が上がるほど「自宅」が減少し、4歳児で「学校、幼稚園・保育園の運動場」が4割を占める。2歳児、3歳児では「近所の空き地や公園」が多くなっている。

図1-5-3 遊ぶ場所 (年齢別 15年)



注1) 2つ選択。  
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ親の回答を分析。  
 注3) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



## 第6節 幼児の発達状況

10年前と比較して、発達に関する項目全般にわたって、各年齢での達成率が下がりつつある。とくにトイレトレーニングに関する項目においてその傾向が顕著である。

### ● 10年前に比べて、5、6歳児であってもできない課題が徐々に増えている

幼児の発達状況に関する質問項目は、05年調査以降に加えられたことから、ここでは、05年から15年までの10年間における比較結果をまとめる。表1-6-1は、生活習慣に関する発達について、子どもの年齢ごとに05年調査と15年調査の結果を示したものである。表からみてとれるように、10年間で10ポイント以上、ないし5ポイント以上、達成率が下がったものも少なくない。達成率が5ポイント以上増加したのは、2歳児における「ひとりで洋服の着脱ができる」という項目のみである。とくに、大幅にポイントが減少したのは、「家族やまわりの人にあいさつする」、「おはしを使って食事をする」、「オムツをしないで寝る」の3項目である。

また、05年調査の際には、4歳児以上であれば、すべての項目において達成率が80%を超えていたが、15年

調査では、5歳児、6歳児でも80%未満の項目が残されたままである。つまり、以前に比べて、ほとんどの子どもができるようになるまでに時間のかかる課題が増えているといえる。

### ● 家族やまわりの人にあいさつする習慣が薄らいでる

表1-6-1においてとくに達成率の減少が著しかった項目の一つに、「家族やまわりの人にあいさつする」があげられる。

図1-6-1は、05年、10年、15年までの10年間における子どもの各年齢での達成率の推移を表したものである。この図から、05年では、1歳児であっても、45.9%と約半数の子どもたちがあいさつできていたのに対して、15年では35.6%にまで落ち込んでいるのがわかる。その後、2歳児においても10年間で10ポイント以上の開きがあり、3歳児、4歳児でも5ポイント以上

表1-6-1 生活習慣に関する発達 (子どもの年齢別 経年比較) (%)

	1歳児		2歳児		3歳児		4歳児		5歳児		6歳児	
	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年
	(660)	(614)	(740)	(583)	(340)	(626)	(312)	(610)	(326)	(671)	(276)	(657)
コップを手で持って飲む	69.5	65.8	98.4	94.8	98.2	96.3	98.1	93.5	97.8	94.0	96.0	92.7
スプーンを使って食べる	64.8	62.3	97.4	95.0	98.2	96.3	98.1	93.5	97.8	94.0	95.7	92.4
家族やまわりの人にあいさつする	45.9	> 35.6	83.5	> 72.6	92.5	> 87.4	93.6	> 87.3	91.8	87.9	91.7	88.0
歯をみがいて、口をすすぐ	14.8	> 9.3	73.3	> 59.1	91.6	> 84.2	95.2	> 88.0	97.5	> 91.6	95.3	91.2
おしっこをする前に知らせる	3.3	4.7	25.2	> 18.4	86.3	> 75.4	97.8	> 90.4	96.9	> 91.9	94.6	90.7
自分でパンツを脱いでおしっこをする	1.2	1.3	17.7	13.0	79.1	> 70.1	98.1	> 90.9	97.3	> 91.9	94.9	90.3
自分でうんちができる	5.6	6.4	24.4	> 18.9	78.8	> 64.4	95.2	> 85.9	96.7	> 90.4	94.6	90.3
ひとりで洋服の着脱ができる	1.4	2.4	18.4	< 23.7	62.0	64.9	92.3	87.5	96.3	> 91.0	93.8	90.7
おはしを使って食事をする	4.5	4.1	32.0	35.2	62.0	58.3	83.7	> 72.1	94.2	> 83.8	93.5	88.9
決まった時間に起床・就寝する	55.6	56.1	62.2	64.4	72.6	68.0	82.4	79.2	85.8	> 77.5	84.4	> 78.2
ひとりで遊んだあとの片付けができる	17.0	16.5	46.8	46.3	64.7	61.7	85.6	> 74.5	88.1	> 80.5	85.1	83.9
オムツをしないで寝る	0.6	1.0	6.3	3.8	45.9	> 35.0	81.1	> 66.0	84.8	> 79.0	90.2	> 83.6

注1) 「できる」の%。  
 注2) 満1歳以上の子どもをもつ人のみ回答。  
 注3) 05年、15年調査の結果を比較し、10ポイント以上の差があったものは濃い網掛け、5ポイント以上10ポイント未満の差があったものは薄い網掛けをしてある。  
 注4) ( ) 内はサンプル数。  
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

減少している。そして、6歳児でも10年前の水準を下回ったままになっている。

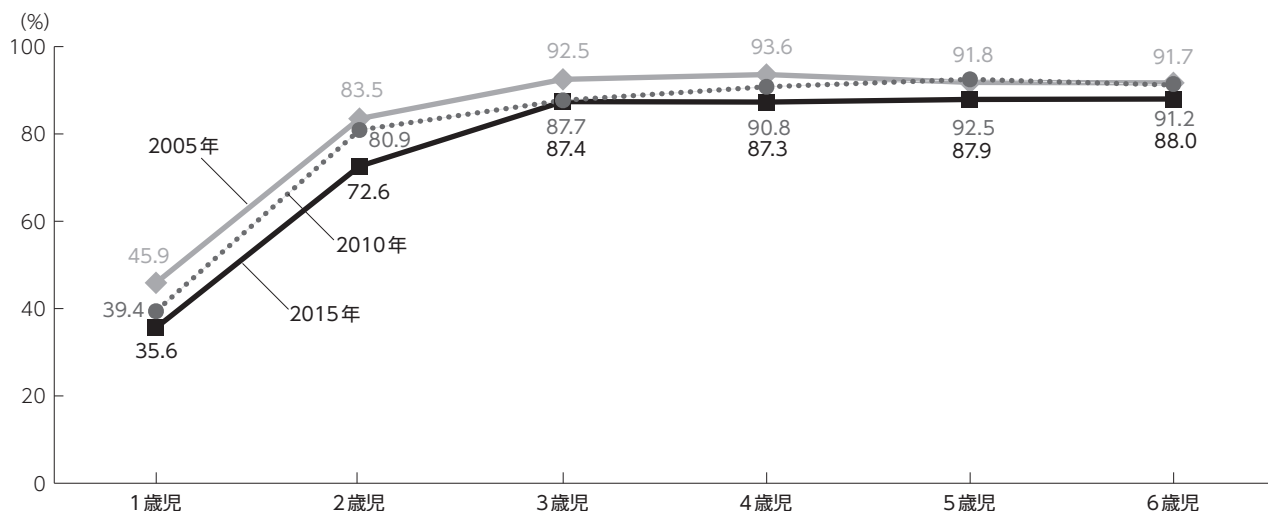
家族やまわりの人へのあいさつは、年齢の上昇とともに、子どもが自発的に行うようになるものというよりも、各家庭で徐々に習慣づけられていくものであり、子どもたちが親や周囲のおとなたちの様子を見様見真似で獲得していくスキルであると考えられる。したがって、ここ10年間にけるこうした結果の背景には、家庭内において、「おはよう」「おやすみ」といった日常的なあいさつをかわす習慣自体が、薄らいでいる可能性があるのではないかとと思われる。

家族間において、礼儀正しくあいさつすること自体が重視されなくなっているのか、あるいは、在園時間の長時間化などを背景に、朝晩ともに慌ただしく過ごし、一日の生活の折々において落ち着いてあいさつするゆとりが失われつつあるのか、今後の検証が必要である。

●10年前よりも、4歳児以降においておはしを使える子どもの割合が減少している

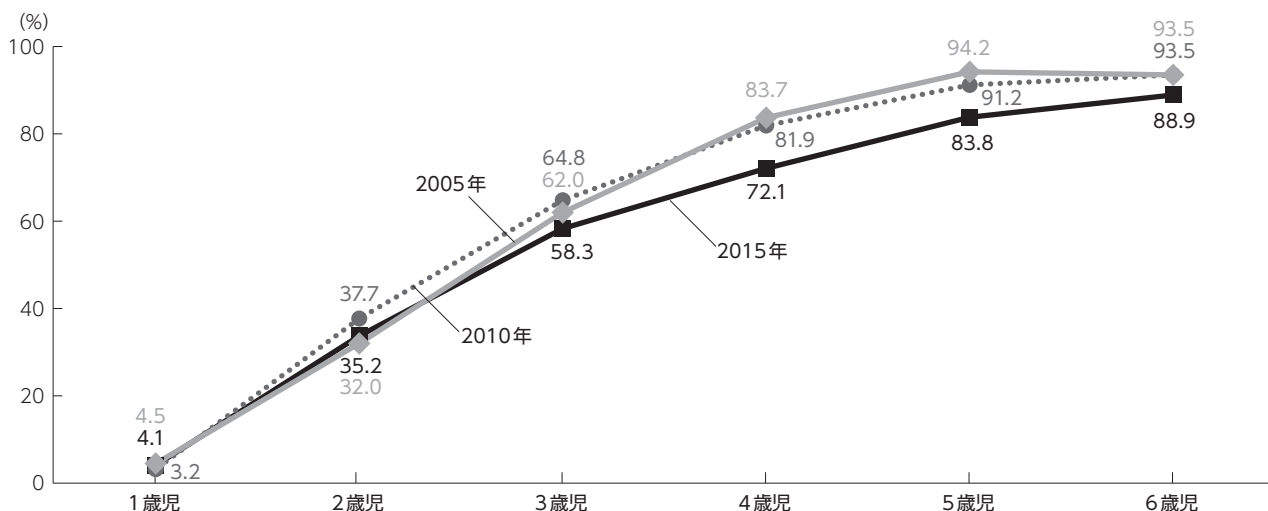
続いて、図1-6-2では、「おはしを使って食事をする」ことができる割合の推移についてまとめた。

図1-6-1 「家族やまわりの人にあいさつする」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。  
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図1-6-2 「おはしを使って食事をする」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。  
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

10年間に於いて、2歳児まではあまり大きな変化はないが、3歳児から徐々に差が開きはじめ、4歳児、5歳児では10ポイント以上減少している。

おはしの使用に関しても、あいさつと同様、おはしを使って食事をするとした習慣自体が薄らいでいるのかもしれない。おはしの代わりにフォークやスプーンを使う機会が増えているとすれば、食事の内容自体も変わりつつあり、おはしを使わずに食べられるメニューが食卓に並ぶ機会が増えている可能性も考えられる。

●夜間のオムツ使用への依存が高まっている

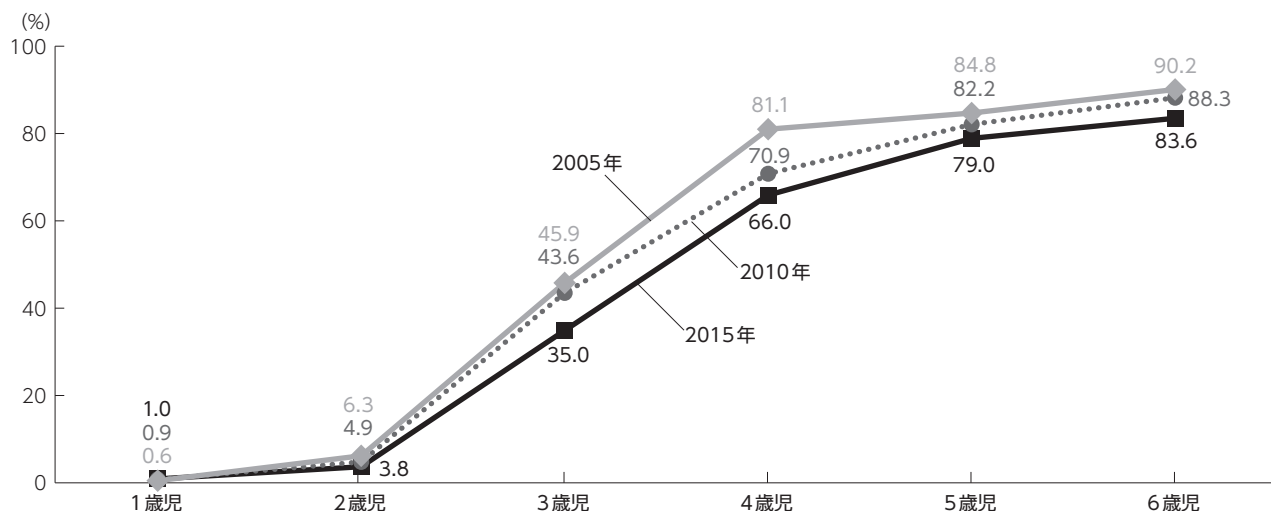
前回の10年調査において、顕著に変化がみられたのが、4歳児での「オムツをしないで寝る」子どもの割合が10ポイント以上減少していた点である(図1-6-3)。

具体的には、05年では81.1%であったのが、10年では70.9%にまで落ち込んだ。そして、今回の調査においてもその傾向は続いており、15年では66.0%まで減少している。さらに、6歳児においても05年調査よりも5ポイント以上の減少がみられていることから、ここ10年間で夜間のオムツ使用への依存は大きく高まっているようである。

また、今回の調査ではこうした傾向が3歳児でもみられ、10年では43.6%だったのが、15年では35.0%となっている。つまり、夜間のオムツを使用するかしないかの分岐点となる年齢が5年前よりも早まっているといえる。

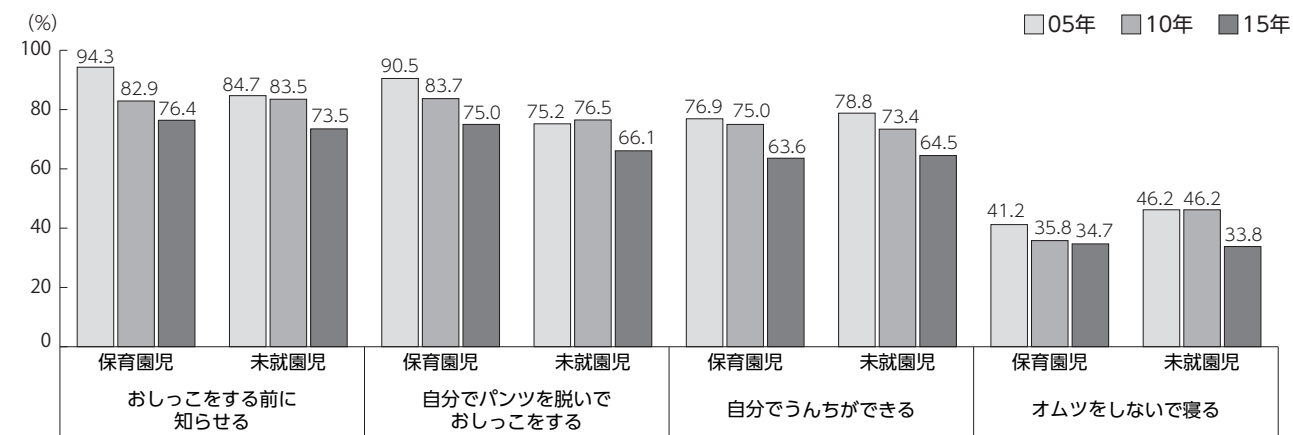
こうした流れを受けて、図1-6-4では、3歳児に限定して、トイレトレーニングに関する課題において、子どもの就園状況による差があるかどうかを検証した結果を表した。

図1-6-3 「オムツをしないで寝る」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。  
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図1-6-4 3歳児におけるトイレトレーニングに関する発達(就園状況別 経年比較)



注1) 「できる」の%。  
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。  
注3) サンプル数は、05年(保育園53人、未就園258人)、10年(保育園136人、未就園330人)、15年(保育園224人、未就園340人)。

10年調査までは、とくに夜間のオムツ使用率においては、未就園児よりも保育園児のほうが高かったが、今回の調査結果によると、就園状況の違いによらず、全体的にトイレトレーニングに関する各課題の達成率の減少傾向が確認できる。「おしっこをする前に知らせる」、「自分でパンツを脱いでおしっこをする」、「自分でうんちができる」、「オムツをしなくて寝る」など、いずれの

項目においても、達成率が下がっている。

こうした背景には、親の意識が強く影響していると推察される。オムツだけではなく、トレーニングパンツなども含め、機能性の向上とともに、トイレトレーニングの煩わしさを回避するという意識が強まっているのではないだろうか。